

## 塩田開発の父 — 久米通賢 —

讃岐高松藩々主松平頼恕が坂出塩田の工事現場を視察に訪れたのはこれで何度目であろうか。その日は朝から相当地に激しい雨が降っていたが、頼恕は用意された席に着くとすぐ

「栄左衛門をよべ。」  
と命じた。

栄左衛門とは、郷普請奉行の久米栄左衛門のことである。今回の坂出塩田開発のすべてを任されている人物で、本名を「通賢」といい、栄左衛門は通称であった。

「がんばっているな。」

頼恕は同行した藩の重役に声をかけた。工事現場では、雨にもかかわらず、数千人の人々がいきいきと働いている。

しかし重役はそれには答えず、何か恐ろしいものでも見るように海のほうを見つめていた。彼には、この工事で完成する塩田というものが、あまり具体的には想像できないらしい。

当時、塩をつくるためには海水を太陽の力で乾燥させ、残った塩分を採集する方法がとられていた。塩田とはその海水を乾燥させるための、いわば巨大な浅いプールである。

このとき栄左衛門が作るうとしていた塩田はおよそ百三十二ヘクタール。それだけの面積に土手を築き、水門を設けて、海水の出入りを調節しなければならぬ。想像もつかない規模である。すでに二万両（今日の五億円ほど）もの大金が藩主の手元金（個人的な費用）から出費されていた。高松藩の財政はこの時期最悪の状態にあり、武士たちに対して儉約の命令も出され、とてもこのような大金

を藩の正規の予算から出すことのできる状態ではなかったのである。このような大工事が本当に藩の財務の助けになるのか。重役の心には大きな疑問があった。

「久米栄左衛門でございます。」

その声にふりむき、平伏している男に視線を向けた重役は思わず、驚きと、怒りの混じった声をあげた。

「栄左衛門。なんじゃその姿は。」

見れば、雨の中、水たまりの側で座っているその男は、髪を縄でくくりつけ、ぼろぼろのはんてんの上に蓑をかぶり、帯はわらわである。しかも、わらじすら履かず、はだしの足はどろだらけであった。

「殿の御前であるぞ。何といういやしい姿だ。」

場所がらをわきまえろ。」

重役の言葉に、栄左衛門は地面を見つめたまま静かに答えた。

「わたくしは、毎日この姿でみんなに指示をあたえています。決して無礼をはたらこうとして、わざわざこの姿をしているわけではありません。」



この身を投げうつての意気込みがあればこそ、人々もあのよう  
に元気に働いてくれていると、思っております。」

この言葉に重役は一瞬たじろいだ。だが彼には栄左衛門の言  
い分を認めてやる余裕がない。そもそもこの工事自体に彼は反  
対であった。栄左衛門が自分から建白書を差し出し、自分で計  
画した工事である。もし、成功すればすべて栄左衛門の功績と  
なるであろう。

「栄左衛門、よく聞け。そなたは仮にも讃岐高松藩十五万石の  
奉行職にある身。その奉行たる身が、そのような姿で人々の前  
に立てばどうなる。藩の権威も、殿の御威光も、人々は軽く考  
えるようになるではないか。そなたは郷普請奉行としてこの工  
事のすべてを任されていることを忘れたのではないか。」

栄左衛門ははじめて顔を上げ、重役を見た。その目に怒りの色はなく、あくまでも冷静である。

「わたくしは、郷普請奉行であるからこの工事を指図しているわけではありません。この工事はわたく  
しから殿様にお願ひし、やらせていただいているのであります。それは、この塩田の完成が、讃岐の  
すべての人々の助けになると信じているからです。」

「何を言う。この藩の財務の苦しい中で、殿様から二万両もの大金をいただき、奉行としてではない  
などとよくも言えたな。」

「二万両はたしかに大金……。」



と、そこまでいって栄左衛門は口をつぐんだ。目の前にいる頼恕をはばかりたのである。殿の手元金から下された二万両はこの時既に底をついてた。栄左衛門は工事を続けるため、自分の屋敷や土地まで借金の抵当に入れていた。そのことをこの重役は知らないのだろうか。あるいは知っているが知らぬふりをしているのだろうか。いや、重役のことはいい。頼恕自身はどうであろう。この殿様はこれだけの大工事が二万両で完成すると思っっているのだろうか。

「どうじゃ、そなた……」

重役がさらに言葉を続けようとしたとき、はじめて頼恕が口を開いた。

「もうよい。」

頼恕はまっすぐ栄左衛門を見つめ、そして言葉を続けた。

「栄左衛門ゆるす。わたしの近くまでよって参れ。」

栄左衛門は一瞬何を言われたか分からなかった。だが、すぐに、

「ははあ。」

返事をする、わずかに膝を進めて頼恕に近づいた。

「いや、そうではない。この傘の中に入れて申しておるのじゃ。そこでは雨に打たれて寒かろう。」



「しかし。」

栄左衛門は遠慮して少ししか進まない。

「早く。」

頼恕の激しい声が響く。栄左衛門は決意して、立ち上がると、

「後免。」

と叫んで進みより、傘の中で両手をついた。

「顔を見せてくれ。」

頼恕の声に、栄左衛門は顔をあげて、頼恕を見た。頼恕は栄左衛門の手をとり、そして言った。

「塩田のことは、すべてその方に任せる。どうかよろしく頼む。」

栄左衛門には、頼恕の目に光っているのは雨の粒ではないように感じられた。

坂出塩田の工事は、一八二九年（文政十二年）

八月、完成した。着工から三年五カ月の後である。

藩主頼恕は、栄左衛門の功労を賞して、坂出墾田の碑を建立している。この碑は現在も残っており、塩田工事のころの苦難を今に伝えている。



坂出墾田の碑